

かけひ い 梶ひ

箕の話

① 修 ② か

③ (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)

梶井基次郎

私は散歩に出るのに二つの路を持っていた。一つは溪たにに沿った街道かいどうで、もう一つは街道の傍そばから溪たにに懸かつた吊橋つりばしを渡って入ってゆく山径やまみちだった。街道は展望を持っていたがそんな道の性質として気が散り易かった。それに比べて山径の方は陰気いんきではあったが心を静かにした。どちらへ出るかはその日その日の気持が決めた。しかし、いま私の話は静かな山径の方をえらばなければならぬ。

助詞C

吊橋を渡ったところから径は杉林
のなかへ入ってゆく。杉の梢が日
を遮り、この径にはいつも冷たい湿っ
ぽさがあつた。ゴチック建築のなか
を辿ってゆくときのような、犇ひし
と迫って来る静寂と孤独とが感じら
れた。私の眼はひとりでに下へ落ち
た。径の傍らには種々の実生や蘚苔、
羊歯の類がはえていた。この径では
そういう矮小な自然がなんとなく
親しく——彼らが陰湿な会話をはじ
めるお伽噺のなかでのよう、眺め
られた。また径の縁には赤土の露出
が雨滴にたたかれて、ちようど風化
作用に骨立った岩石そつくりの恰好

になつているところが^{いただき}あつた。その
削り立った峰の頂^{いただき}には^{あて}みな一つ宛小
石が載つかつていた。ここへは、し
かし、日が^{こざえ}まつたく射して^{すきま}来ないの
ではなかつた。梢の隙間を洩れて来
る日光が、^①径のそこ^②ここ^③や杉の幹へ、
^{ろうそく}蠟燭で照らしたような弱い日なたを
作っていた。歩いてゆく私の頭の影
や肩先の影がそんななかへ現われて
は消えた。なかには「まさかこれま
でが」と思うほど淡いのが草の葉な
どに染まっていた。試^{ため}しに杖^{つえ}をあげ
て見るとささくれまでがはつきりと
写った。

この径を知ってから間もなくの頃、

ある期待のために心を緊張させながら、私はこの静けさのなかをことにしばしば歩いた。私が目ざしてゆくのは杉林の間からいつも氷室から来るような冷気が径へ通っているところだった。一本の古びた筧がその奥の小暗いなかからおりて来ていた。耳を澄まして聴くと、幽かなせせらぎの音がそのなかにきこえた。私の期待はその水音だった。

どうしたわけで私の心がそんなものにも惹きつけられるのか。心がわけでも静かだったある日、それを聞き澄ましていた私の耳がふとそのなかに不思議な魅惑がこもっているのを

知ったのである。その後^{あと}追いおいに
気づいていったことなのであるが、
△この美しい水音を聴いていると、そ
の辺りの風景のなかに変な錯誤^{さくご}が感
じられて来るのであった。△香もなく
花も貧しいのぎ^{らん}蘭がそのところどこ
ろに生えているばかりで、杉の根方
はどこも暗く湿っぽかった。そして
筧といえ~~ば~~やはりあたりと一帯の古
び朽ちたものをその間に横たえてい
るに過ぎないのだった。「そのなか
からだ」と私の理性が信じていても、
澄み透^{とお}った水音にしばらく耳を傾け
ていると、△聴覚と視覚との統一はす
ぐばらばらになってしまつて、△変な

錯誤の感じととも^{いぶか}に、訝しい魅惑が
私の心を充たして来るのだった。

私はそれによく似た感情を、露草^{つゆくさ}
の青い花を眼にするととき経験するこ
とがある。草叢^{くさむら}の緑とまぎれやすい
その青は不思議な惑わしを持ってい
る。私はそれを、露草の花が青空や
海と共通の色を持っているところか
ら起る一種の錯覚だと快く信じてい
るのであるが、見えない水音^{みずおと}の醸^{かも}し
出す魅惑はそれにどこか似通^{にかよ}ってい
た。

すばしこく枝移^{えだうつ}りする小鳥のよう
な不定さは私をいらだたせた。

蜃気楼^{しんきろう}のようなはかなさは私を切な

くした。そして深^{しん}秘^ひはだんだん深^{しん}ま^まつてゆくのだった。私^{わたし}に課^かせられている暗^{あん}鬱^{うつ}な周^{しゅう}圍^いのなかで、やがてそれは幻^{げん}聴^{ちやう}のように鳴^なりはじめた。束^{つか}の間^まの閃^{せん}光^{こう}が私^{わたし}の生^い命^{のち}を輝^{かが}かす。そのたび私^{わたし}はあつあつと思^{おも}った。それは、しかし、無^む限^{げん}の生^{せい}命^{めい}に眩^{げん}惑^{わく}されるためではなかつた。私^{わたし}は深^{しん}い絶^{ぜつ}望^{ぼう}をまのあたりに見^みなければならなかつたのである。何^{なに}という錯^{さく}誤^ごだらう！ 私^{わたし}は物^{ぶつ}体^{たい}が二^につに見^みえる酔^よっ払^はいのよう^{よう}に、同^{どう}じ現^{げん}実^{じつ}から二^につの表^ひ象^{しょう}を見^みなければならなかつたのだ。しかもその一方^{いっぺん}は理^り想^{さう}の光^{こう}に輝^{かが}かされ、もう一方^{もういっぺん}は暗^{あん}黒^くの絶^{ぜつ}望^{ぼう}を背^せ負^おつてい

た。そしてそれらは私がはつきり
見ようとする途端一つに重なって、
またもとの退屈な現実に帰ってしま
うのだった。

↳ 笥かけひは雨がしばらく降らないと水が
涸かれてしまう。また私の耳も日によつ
てはまるつきり無感覚のことがあつ
た。そして花の盛りが過ぎてゆくの
と同じように、いつの頃からか笥に
はその深祕しんぴがなくなってしまう、私
ももうその傍そばに佇たたずむことをしなくなつ
た。しかし私はこの山径を散歩しそ
こを通りかかるたびに自分の宿命に
ついて次のようなことを考えないで
はいられなかった。

「課せられているのは永遠の退屈だ。生の幻影は絶望と重なっている」